

〔報告〕

## 男性看護師が増加することに対する男性看護師の認識

### Recognition of the male nurse for male nurses increasing

上杉 佑也 前田 貴彦 辻本 雄大 古川 陽介 伊藤 大輔 平田 研人

#### 【要旨】

男性看護師が増加することに対する男性看護師自身の認識を明らかにするために、全国の150床以上の病院に勤務する男性看護師（准看護師含む）8,539名を対象に質問紙調査を実施した。回答者3,713名のうち自由記述欄に記載のある2,264名を分析対象とした。分析の結果、46のサブカテゴリー、13のカテゴリーが抽出された。男性看護師の認識として、【男性看護師に期待されている役割が発揮できる】【患者にとって有益である】等の男性看護師が増加することにより肯定的な影響があることから増加を望むという認識、【患者からの需要が少ない】【組織にとって問題が生じやすい】等の男性看護師が増加することにより否定的な影響があることから増加を望まないという認識、【増加することで現状に変化はない】等の男性看護師が増加することでの影響は少ないという認識、【性差を考慮する必要はない】等の看護は性中立的な職業とする認識に大別されることが示唆された。

【キーワード】 男性看護師 認識 男女比率 性的役割

#### I. はじめに

看護師という職業は、圧倒的に女性が多数派の状況の中で確立され、伝統的に女性の職業として位置づけられてきた。日本においては、それまで男性と女性で異なっていた看護教育の内容を1989年に男女同一のカリキュラムに改正し、更に男女雇用機会均等法などの男女平等の理念を背景に、2002年には「看護師」という男女同一名称へ変更となった<sup>1)</sup>。そのような変化の中、就業看護師全体における男性看護師の割合は、1982年では1.3%であるものの、2004年では31,594人で2.6%、2014年現在では73,968人で6.8%となっており、ここ10年間の推移を見ても就業男性看護師数は2倍以上に増加している<sup>2)</sup>。そして、過去には精神科等の特定の診療科に配属される傾向にあった職務領域が拡大するなどの変化がみられるようになってきている<sup>3)4)</sup>。しかし、未だに看護師は女性職というイメージが根強く、多くの男性看護師が他職種の男性職員と間違えられたという経験を有しており<sup>5)</sup>、依然として少数派という現状に大きな変化はないといえる。

男性看護師に関する患者を対象とした調査では、役割期待や男性看護師による看護行為の受容状況、男性看護師を対象とした調査では職務満足度や医療職者との人間関係、キャリア形成等をテーマとした研究がみられ<sup>6)7)</sup>、様々な視点で男性看護師について研究が行われている。その中で、男性看護師は職務上、女性患者へのケアを断られることや女性看護師集団との関係性の構築において困難を抱えており<sup>8)9)10)11)12)</sup>、女性看護師とは異なる体験をしていることが伺える。そのような男性看護師独自の経験の中で、「男性看護師は少数であるために目立つ」、「ジェンダーステレオタイプによる困難」といった困難については、男性看護師が少数派であることや歴史的背景から女性の職業であるというイメージ、あるいは男性という「性」が影響していることが考えられる。

男性看護師のストレスに関する調査において、少数派に関連するストレスは配置率が低いほど知覚が高い<sup>13)</sup>との報告がされており、先の困難やストレスがあることで、男性看護師に期待されている役割の発揮

を阻害することに繋がるものと思われる。少数派であることから生じる困難等については、男性看護師の総数が増加することで解消される側面もあると考えられるが、看護師全体において男性看護師が増加することに対して男性看護師自身がどのような認識を持っているかは明らかになっていない。男性看護師の認識を明らかにすることで、少数派である男性看護師に対する具体的な支援を考える上での有用な基礎資料になると考えた。

## II. 目的

看護師全体において男性看護師が増加することに対する男性看護師自身の認識を明らかにする。

## III. 方法

### 1. 対象

全国47都道府県の国公立大学病院、国立病院機構、公立病院、個人病院等の内、150床以上で複数（2診療科以上）の診療科を有する病院から、都道府県別の施設数の比による層化抽出法で無作為に標本を抽出した。1,150施設の施設代表者に書面を持って調査協力依頼を行い、544施設より了承を得られた。本研究に同意が得られた施設代表者に調査対象者の選出を依頼し、協力の得られた施設に勤務する男性看護師（准看護師含む）8,539名を対象とした。

### 2. 調査方法

平成24年12月～平成25年4月に、選出された対象者に無記名の選択式一部記述式の自記式質問紙を用いた郵送調査を実施した。質問項目は、先行研究を参考に<sup>14)</sup>男性看護師9名で検討し、更に、1年目から看護師長を含む男性看護師10名に2回のプレテストを実施し内容の追加・修正を行った。主な質問内容として、「回答者の年齢や臨床経験年数」、選択式では「病院内における男性看護師の集まりや組織の有無」、「今後の進学希望の有無」、「女性患者への看護におけるためらいの程度」、「女性看護師等の関わりで苦慮した経験の有無」について2件法あるいは5件法で、自由記述では「看護師全体において男性看護師が増加することに対する男性看護師自身の考え」について回答を求めた。質問紙の配布は協力施設の看護師長等に依頼し、質問紙の回収は、回答者自身による郵送での返送

とした。

## 3. 分析方法

男性看護師が増加することに対する男性看護師の認識に関する自由記述内容について記載内容を整理し、内容の類似性、関連性からサブカテゴリー、カテゴリーを生成した。また、分析の真実性を高めるため、質的研究経験者を含む研究メンバーで、適切なカテゴリー化とカテゴリー名となるよう全員の意見の一致が得られるまで繰り返し検討した。

## IV. 倫理的配慮

本研究は、三重県立看護大学倫理審査会の承認（通知番号122002）を得て実施した。研究対象者への質問紙配布に先立って、対象施設の代表者に研究協力依頼を行い、許可を得られた施設に必要部数の質問紙を送付し、対象者への質問紙の配布は協力施設の看護師長等に依頼した。具体的な倫理的配慮として、研究目的・方法、プライバシーの保護と秘密保持、調査協力への自由性、協力可否による不利益の回避、結果の公表について研究協力依頼文に記載した。なお、質問紙の返送をもって本研究への同意とする旨も合わせて記載し、書面にて説明した。よって、質問紙の返送をもって本研究協力への同意とみなした。

## V. 結果

### 1. 回答者の背景

回答者は3,713名（回収率43.5%）で、そのうち自由記述欄に記載のある2,264名を分析対象とした。回答者の背景として、平均年齢 $32.9 \pm 9.6$ 歳、平均臨床看護経験年数 $9.24 \pm 7.1$ 年目であった。現在勤務する病院内で男性看護師の集まりや男性看護師会のような組織が「ある」と回答した者は44.0%、「ない」56.0%であった。看護関連を含む学校への進学について「進学希望なし」と回答した者は75.5%、「進学希望あり」24.5%であった。女性患者の羞恥心を伴う看護を実施する際のためらいを「感じる」と回答した者は32.4%、「やや感じる」37.6%、「どちらでもない」11.4%であった。女性看護師との仕事上の関係づくりで苦慮した経験が「ある」と回答した者は46.8%、「ない」53.2%であった。

## 2. 男性看護師が増加することに対する男性看護師の認識

分析の結果、男性看護師が増加することに対する男性看護師の認識として、46の《サブカテゴリー》から、13の【カテゴリー】に分類された(表1)。なお、本文中で【 】はカテゴリー、《 》はサブカテゴリー、「 」は自由記述の記載内容を示す。

【男性看護師に期待されている役割が発揮できる】では、《体力が必要な看護において必要である》や《機器の扱いにおいては男性の方が得意である》、《暴言・パワハラなどの対応において必要である》と、一般的に男性が得意とされている分野において役割を発揮できると考えていた。また、「男女の価値観が相互に違いがある中で、多面的な捉え方ができ、メリットがあると考えられる」といったように《男性ならではの視点が必要である》との考えや《男性ならではの優しさや冷静さが必要である》と考えていた。

【患者にとって有益である】では、同性への看護において《男性患者の羞恥心を伴うケアにおいて必要である》との考えや「患者・家族からも男性がいて安心するとか良かったと言われることがある」と、《患者にとって男性看護師の方が受け入れやすいこともある》と考えていた。また、「多様なニーズを持つ患者さんに対応できるよう、もう少し男性の比率が増えたほうが良いと思う」と、《性別により看護師の選択が行える患者のニーズへの対応が必要である》という認識をしていた。

【男性看護師自身にとって有益である】では、同性の看護師が少ない現状の中で《男性看護師の同性としてのモデルとして必要である》、《同性がいることで安心感に繋がる》、《男性が発言しやすくなる》との考えや、《男性看護師の社会的な認識が高まり患者対応がしやすくなる》、《女性社会のために起きる弊害や偏見が払拭される》、《少数派であることに伴う弊害や偏見が払拭される》との認識があった。

【職場環境の改善に繋がる】では、「女性と男性の管理は違うと思う。男性が増えればもう少し違う環境で仕事ができると思う」と、《男性の管理職が必要である》との考えや、「女性スタッフからも女性だけでなく男性がいた方が和む、話がまとまる、と言われる」等と実際に女性看護師の意見からも《職場の雰囲気

気が改善される》と考えており、職場環境に影響があると認識していた。

【看護師の社会的な認識が高まる】では、男性看護師の比率が増加することで《看護師全体の社会的地位が向上する》ことに繋がり、ひいては給与面での改善を望むとの考えがみられた。また、「看護師希望の男性が、男性であることを理由に看護師をあきらめる可能性が低くなると思う」と、《男性が看護師を目指しやすくなる》といった影響があると考えていた。

【患者からの需要が少ない】では、「女性の気配りのほうが細やかだと思う」と、《看護は女性の方が適している》と考えていたり、《患者にとって女性看護師の方が受け入れやすい》と感じており、「男性看護師が増えすぎても女性患者への配慮が課題となるのが目に見える」と、特に《女性患者にとって男性看護師は受け入れられにくい》と考えていた。

【組織にとって問題が生じやすい】では、《男性看護師の需要は部署により限られる》ことや「多すぎても病棟は、女性の患者を考慮すると夜勤が男のみは組めない」ために《勤務体制上の問題が生じる》と考えていた。更に「安易に増えると悪い部分も目立つてくるように思う」と、《職場の雰囲気への悪影響が生じる》、《看護の質の低下に繋がる》と考えていた。

【男性が就く職業として推奨しにくい】では、自身の経験から《女性社会での苦労があるため薦められない》ことや家庭の経済的基盤を担う立場が多いことから《給与面での改善がないと薦められない》ために、増加することを望めない状況があると考えていた。

【男性看護師にとって不利益が生じる】では、少数派という現状だからこそ「差別化できていて有利になる点が多い」と感じており、《増加することで優位性がなくなる》との懸念を示す考えがみられた。

【増加するには条件が必要である】では、《社会のニーズがあれば増加する》と、増加するには社会の状況次第であるとの考えや、安易な職業選択によるモチベーションの低い者がいることから《適性の無い看護師が増加することへの懸念がある》との考えがみられた。また、《増加することでのメリット・デメリットが共に存在する》ことや、男性看護師数の増加を望むものの増加することで生じる問題への懸念から《看護師の男女比のバランスが必要である》と、単純な増加は望んでいないとの認識があった。

表1 男性看護師が増加することに対する男性看護師の認識

カテゴリー	サブカテゴリー
男性看護師に期待されている役割が発揮できる	体力が必要な看護において必要である
	暴言・パワハラなどの対応において必要である
	男性ならではの視点が必要である
	男性ならではの優しさや冷静さが必要である
	機器の扱いにおいては男性の方が得意である
	離職や休職が少ないことで安定した労働力の確保に繋がる
	部署の特色において男性が必要である
患者にとって有益である	男性患者の羞恥心を伴うケアにおいて必要である
	患者にとって男性看護師の方が受け入れやすいこともある
	性別により看護師の選択が行える患者のニーズへの対応が必要である
	安定した労働力の確保により質の高い看護に繋がる
	体力が必要な看護において患者の安心に繋がる
男性看護師自身にとって有益である	男性看護師の同性としてのモデルとして必要である
	同性が多くなり働きやすい環境への変化に繋がる
	同性がいることで安心感に繋がる
	男性が発言しやすくなる
	少数派であることに伴う弊害や偏見が払拭される
	女性社会のために起きる弊害や偏見が払拭される
	男性看護師の社会的な認識が高まり患者対応がしやすくなる
	男性用の施設や環境面での改善に繋がる
男性看護師の社会的地位の向上に繋がる	
職場環境の改善に繋がる	男性の管理職が必要である
	職場の雰囲気改善される
看護師の社会的な認識が高まる	看護師全体の社会的地位が向上する
	男性が看護師を目指しやすくなる
患者からの需要が少ない	看護は女性の方が適している
	患者にとって女性看護師の方が受け入れやすい
	女性患者にとって男性看護師は受け入れられにくい
組織にとって問題が生じやすい	勤務体制上の問題が生じる
	男性看護師の需要は部署により限られる
	職場の雰囲気への悪影響が生じる
	看護の質の低下に繋がる
男性が就く職業として推奨しにくい	女性社会での苦労があるため薦められない
	給与面での改善がないと薦められない
男性看護師にとって不利益が生じる	増加することで優位性がなくなる
増加するには条件が必要である	社会のニーズがあれば増加する
	適性の無い看護師が増加することへの懸念がある
	増加することでのメリット、デメリットが共に存在する
	看護師の男女比のバランスが必要である
性差を考慮する必要はない	看護において性別は関係ない
	看護において性別を考慮するべきではない
	看護師不足の解消のため看護師自体の増加を期待する
	女性に限定された仕事ではない
増加することで現状に変化はない	男性看護師が増加することでのメリット・必要性を感じない
	増加することで現状に変化はもたらさない
現状で問題はない	現状のバランスで問題はない

【性差を考慮する必要はない】では、《女性に限定された仕事ではない》、《看護において性別は関係ない》と男女関係なく就くことができる職業であると捉えていたり、《看護において性別を考慮するべきではない》と性差に捉われた看護をすべきではないとの考えがあった。また、看護師不足という現状を改善するためにも、男性が増えることで総数の増加を望む声と、男性という性別に関わらず《看護師不足の解消のため看護師自体の増加を期待する》との考えも見られた。

【増加することで現状に変化はない】では、「男性看護師の人数の増減に関わらず、自分の仕事は変わらない」といった思いのように《増加することで現状に変化はもたらさない》と、男性看護師の増加によって自身の置かれている状況や看護の現状に特に影響を及ぼさないと考えていた。また、「今まで男性であることで利点を感じたことが特にない」ため《男性看護師が増加することでのメリット・必要性を感じない》と、性別により特別に肯定的な影響を及ぼさないと考えていた。

【現状で問題はない】では、「現状の割合で特に困ったことはない」、「多くなっても少なくなっても特に気にならない」等と、《現状のバランスで問題はない》との認識が見られた。

## VI. 考 察

男性看護師が増加することに対する男性看護師の認識として、【男性看護師に期待されている役割が発揮できる】、【患者にとって有益である】、【男性看護師自身にとって有益である】等の男性看護師が増加することにより肯定的な影響があるという認識、【患者からの需要が少ない】、【組織にとって問題が生じやすい】、【男性看護師にとって不利益が生じる】等の男性看護師が増加することにより否定的な影響があるという認識、【増加することで現状に変化はない】等の男性看護師が増加することでの影響は少ないという認識、【性差を考慮する必要はない】といった看護は性中立的な職業とする認識に大別されることが示唆された。更に、男女比のバランスやデメリットも同時に存在するといった【増加するには条件が必要である】との認識のように、男性看護師が増加することによる肯定的な影響があったとしても、男性看護師が増加す

ることには慎重さが必要との多様な認識が存在している。また、増加に肯定的な【患者にとって有益である】という認識と否定的な【患者からの需要が少ない】といった認識、あるいは【男性看護師にとって有益である】と【男性看護師にとって不利益が生じる】といった認識のように、互いに相反する認識が生じていることが伺える。以上の点を踏まえて、男性看護師が増加することに対する『患者への看護』、『男性看護師に期待される役割』、『男性看護師自身への影響』、『社会的な認知への影響』、『性差』への関連を中心に考察していく。

### 1. 患者への看護に関連した認識

本研究において、《患者にとって女性看護師の方が受け入れやすい》、《看護は女性の方が適している》、《女性患者にとって男性看護師は受け入れにくい》といった男性が看護に不向きとの認識が生じる理由として様々な理由が考えられる。その背景として、男性看護師が患者を看護する際に、羞恥心を伴う処置やケアのみならず感情面での看護において難しさを感じ、更には女性看護師と交替する際の困難感も抱いている<sup>8)9)10)11)</sup>。また、患者を対象とした調査においても、女性患者は清潔や排泄に関するケア等で男性看護師に抵抗感があったり、女性看護師に信頼を高く感じており、女性看護師からの援助を希望している状況がみられた<sup>15)16)17)</sup>。このように、患者から否定的な認識を感じとり、自身も患者への看護において困難を抱くことで、男性が看護に向かないとの認識を生じるものと推察される。

一方で、《男性患者の羞恥心を伴うケアにおいて必要である》、《患者にとって男性看護師の方が受け入れやすいこともある》等の【患者にとって有益である】との相反するような認識もみられている。このような認識の背景として、男女問わず男性看護師と接した経験のある患者は男性看護師に肯定的な印象を持っており、男性看護師が必要と感じているという報告がされている<sup>18)19)</sup>。このような肯定的な患者の認識を自身の行う看護の中で感じることで、患者にとって男性の看護師も必要といった認識に繋がっているものと考えられる。

## 2. 男性看護師に期待される役割に関連した認識

男性看護師に期待されている役割として、業務上では力仕事やME機器の取り扱い、職場への影響では職場の雰囲気や穏やかになるとの影響やスタッフ間の潤滑油的役割、女性看護師とは異なる「男性の視点」や「冷静で穏やかな患者対応」等が挙げられている<sup>20)21)22)23)</sup>。今回の結果における、《体力が必要な看護において必要である》、《暴言・パワハラなどの対応において必要である》、《機器の扱いにおいては男性の方が得意である》、《職場の雰囲気が改善される》、《男性ならではの視点が必要である》といった認識は、患者や女性看護師に期待される役割と一致しており、実際に男性看護師はそれらの役割を果たすようにふるまっている<sup>10)24)</sup>。このように他者から期待されている役割を、男性看護師自身も自覚し、女性看護師とは異なる役割を発揮する必要性を認識していると考えられる。

男性看護師に期待される役割がある一方で、《職場の雰囲気への悪影響が生じる》と考えたり、《勤務体制上の問題が生じる》との認識も見られる。先に述べたように、男性看護師は特に女性患者の対応が難しい場合があるが、実際に男性看護師のみで夜勤を実施することはほとんどなく<sup>25)</sup>、看護管理職者が女性患者への対応などを考慮している結果と推察される。特に勤務者の少ない夜勤での勤務体制では問題が生じることは想像に難しくなく、そのような状況を懸念することが増加に否定的な認識に繋がっていると考えられる。

## 3. 男性看護師自身への影響に関連した認識

先行研究における男性看護師の困難やその職業経験として、モデルの不在により将来性が見えないといった不安を抱えていること、少数派であることで技術の失敗が目立ちやすいことでのプレッシャーがあること、女性看護師が多数の環境の中で孤立を感じたり、相談がしにくいこと等が明らかとなっている<sup>8)9)10)11)26)</sup>。また、男性と女性では、物事に対する価値観や取り組み方、思考等に相違があったり<sup>27)</sup>、特に精神面では同性でないと分かり合えない部分もある<sup>28)</sup>。このことから、先に述べた困難は同性である男性看護師が少ないことで生じている問題と言える。そのため、《男性看護師の同性としてのモデルとして必要である》、《男性が発言しやすくなる》、《同性がい

ることで安心感に繋がる》、《女性社会のために起きる弊害や偏見が払拭される》といった認識は、男性看護師にとって困難な現状があるからこそ、男性看護師が増加することでこれらの諸問題が解決されるとの期待から生じていると考えられる。また、現状の困難があることで、《女性社会での苦労があるため薦められない》といった増加への否定的な認識にも繋がっているものと推察される。

一方で、男性看護師は医師との関係性等において男性性による優遇を認識していたり<sup>29)</sup>、少数者が注目されやすいことから好意的な印象や評価を得やすいという「利の確信」を経験していることが報告されている<sup>30)</sup>。このように少数派の現状に優位性を感じている者は、同性の看護師が増加することにより希少性が失われるため、【男性看護師にとって不利益が生じる】と認識するに至るものと思われる。

## 4. 社会的な認知への影響に関連した認識

矢原は<sup>31)</sup>、伝統的に女性向きの職業とみなされてきた、女性が多数を占める看護職や保育職等のいわゆる「ピンクカラー・ジョブ」に就く男性を「男性ピンクカラー」と呼んでいる。男性ピンクカラーが男性固有の課題を有することを報告しており、その一つとして、ピンクカラー・ジョブとして他の職業に比べ社会的および経済的評価が低いという問題があるとしている。社会的および経済的評価の課題は、男性が多数派を占める職業領域に参入する女性は「上昇」のイメージで捉えられがちであるのに対し、男性は「下降」のイメージで語られる社会的イメージがあるとしている。このように社会的および経済的評価が低いという特色があることから《給与面での改善がないと薦められない》という認識に影響を及ぼしているものと考えられる。女性が多数を占める職業の特色として社会的および経済的評価が低いという現状があることを考えると、男性が増加することによって看護という職業が持つ女性的イメージを払拭する糸口となる可能性は否定できない。そのイメージを払拭することで《男性看護師の社会的地位の向上に繋がる》と考えるだけでなく、ひいては《看護師全体の社会的地位が向上する》ことにも繋がるものと期待していることが推察される。

## 5. 性差に関連した認識について

矢原<sup>31)</sup>、男性ピンクカラーが直面する諸課題に対する戦略として、「男性性を不可視化する」と「男性性を可視化する」の大きく2つに整理している。ここまで述べてきた男性看護師の増加に関する認識は、この男性性を強調した結果、肯定的な影響あるいは否定的な影響があるといった、男性性を可視化した戦略故の認識といえる。対して、《看護において性別は関係ない》との考えもみられ、これは矢原<sup>31)</sup>が指摘する「看護職自体の内容を女性性や男性性に本来的関係の無い性中立的なもののみならずことにより、職業としての看護職を性のカテゴリーの作用から引き離そうとする試み」に当てはまると考えられる。また、男性看護師が女性患者への羞恥心を伴う看護を実施する際に、多くの者がためらいを感じていたり、「性差を意識せず毅然とした態度で接する」ことで対処している現状が報告されている<sup>8)32)</sup>。《看護において性差を考慮するべきではない》との認識は、性差を意識しすぎること躊躇し、必要な看護の提供に支障が出ることを考慮したものと推察される。このような性差を考慮しない、看護は性中立的な職業とする認識は、男性性を不可視化するという戦略であり、男性看護師が看護を提供するうえで必要な選択と考えられる。しかし、看護が身体接触を伴う職業である以上、患者の立場を考えた場合に性差を完全に切り離すことは難しく、両性がバランスよく看護を行えるようになることが望ましいと考えられる。

### 本研究の限界と今後の課題

男性看護師が増加することに対する男性看護師の認識には、その男性看護師の置かれている状況等が影響することが考えられ、そのような認識を生じさせる背景との関連についても検討する必要があると思われる。

## Ⅶ. 結論

1. 男性看護師が増加することに対する男性看護師の認識として、【男性看護師に期待されている役割が発揮できる】【患者にとって有益である】【男性看護師自身にとって有益である】【職場環境の改善に繋がる】【看護師の社会的な認識が高まる】【患者からの需要が少ない】【組織にとって問題が生じや

すい】【男性が就く職業として推奨しにくい】【男性看護師にとって不利益が生じる】【増加するには条件が必要である】【性差を考慮する必要はない】【増加することで現状に変化はない】【現状で問題はない】が見出された。

2. 男性看護師が増加することに対する男性看護師の認識には、男性看護師が増加することにより肯定的な影響があることから増加を望むという認識、男性看護師が増加することにより否定的な影響があることから増加を望まないという認識、男性看護師が増加することでの影響は少ないという認識、看護は性中立的な職業とする認識に大別される。

### 【謝 辞】

本研究の実施にあたり、ご理解とご協力を賜りました看護部長様、並びに質問紙にご回答を頂いた男性看護師の皆様へ厚く御礼申し上げます。

なお、本研究は、平成24年度三重県立看護大学学長特別研究費で実施した研究の一部である。また、本研究の一部を第20回日本看護管理学会学術集会で発表した。

### 【文 献】

- 1) 山崎裕二：男性看護職の歴史の変遷と現在 今日 今日的課題と期待される点、看護教育, 52(4), 264-268, 2011.
- 2) 平成26年度衛生行政報告例, 2015/9/4. [http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/GL08020103.do?\\_to=GL08020103\\_&listID=000001135697&requestSender=estat](http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/GL08020103.do?_to=GL08020103_&listID=000001135697&requestSender=estat)
- 3) 日本看護協会：日本看護協会調査研究報告1995年 病院看護基礎調査, 44, 1997.
- 4) 日本看護協会：日本看護協会調査研究報告1999年 病院看護基礎調査, 45, 2001.
- 5) 上杉佑也、前田貴彦、荒木学、他：男性看護師に対する周囲の見方および男性看護師間の連携に関する認識と実際、日本看護学会論文集 看護管理, 44, 75-78, 2014.
- 6) 竹井留美、横内光子：男性看護師に関する研究の動向、日本看護研究学会雑誌, 34(3), 404, 2011

- 7) 矢島直樹：臨床での男性看護師の実態に関する文献検討と支援のあり方の一考察，福井県立大学論集，44号，147-163，2015.
- 8) 吉田裕二郎，赤司 千波：病棟における看護において男性看護師が感じる困難とその対応－整形外科病棟と外科病棟勤務者に焦点を当てて－，日本看護学会論文集 看護総合，41号，24-27，2010.
- 9) 高橋良，田中真琴，任和子：一般病棟に勤める男性看護師が職場で感じる困難とその対処，京都大学大学院医学研究科人間健康科学系専攻紀要，健康科学，9，41-51，2014.
- 10) 松浦圭吾，大林けい，児島香織，他：一般病棟における男性看護師が感じる困難とその対処に関する研究，日本看護学会論文集 看護総合，43号，227-230，2013.
- 11) 坪之内建治，有田広美：男性看護師が感じる困難とそれらの困難を経験して成長する過程，日本看護学会論文集 看護管理，39号，309-311，2008.
- 12) 加古大貴，前田貴彦：小児看護において男性看護師が認識する困難－20代の男性看護師への面接調査から－，日本小児看護学会誌，22(2)，75－81，2013.
- 13) 松尾新也，小林治子，黒柳一枝，他：男性看護師の配置率とストレスに対する知覚との関係-A件の総合病院に勤務する男性看護師の質問紙調査より-，日本看護学会論文集 看護管理，38，366-368，2007.
- 14) American Assembly for Men in Nursing BERNARD HODES GROUP：Men in Nursing Study.Hodes Research,2013/10.17 <http://aamm.org/docs/meninnursing2005survey.pdf>
- 15) 吉川圭，河合晃子：一般病棟における患者の男性看護師によるケアに対する感じ方，日本看護学会論文集 看護管理，45，366－369，2015.
- 16) 池田一貴，内田宏美，木村真司，他：男性看護師の看護ケアに対する患者の信頼－患者の性差による比較－，島根大学医学部紀要，36，61－66，2013.
- 17) 松岡真弓，藤田倫子：性差による看護師－患者関係における共感と信頼の特徴－女性看護師と男性看護師との相違から－，看護・保健科学研究誌，10(1)，210-219，2010.
- 18) 大山祐介，戸北正和，小川信子，他：男性看護師に対する女性患者の認知度とニーズに関する研究，保健学研究 19(1)，13-19，2006.
- 19) 小嶋亜紀子，筑後幸恵：男性看護師に対する入院患者の受容，日本看護学会論文集 看護管理 35，366-368，2004.
- 20) 明野伸次：男性看護師に対する業務評価・役割期待に関しての文献的考察，北海道医療大学福祉学部紀要，11，95-100，2004.
- 21) 貝沼純，斎藤美代，佐藤尚子，他：女性看護師が男性看護師に期待する職務・役割に関する調査研究，福島県立医科大学看護学部紀要，10，23-30，2008.
- 22) 高尾辰徳，阪下順一，高橋優太，他：男性看護師が職場環境に与える影響，日本看護学会論文集. 看護管理 43，483-486，2013.
- 23) 藤川君江，渡辺俊之，林真紀，他：精神科病院において男性看護師に期待される役割：女性看護師アンケートからの分析，日本精神科看護学術集会誌，57(2)，244-248，2014.
- 24) 田渕智之，吉川三枝子：新人男性看護師の職場における人間関係の形成，日本看護学会論文集 看護総合，42，150-153，2012.
- 25) 杉野健士郎，前田貴彦，立松生陽，他：男性看護師の就業状況に関する認識と実際，日本看護学会論文集，44，79-82，2014.
- 26) 木許実花、福田里砂、赤澤千春：男性看護師が抱える悩みや問題の現状と職務キャリアの関係(第1報) 女性多数の職場において男性看護師が抱える悩みや問題の現状について，京都大学大学院医学研究科人間健康科学系専攻紀要 健康科学，7，75-80，2012.
- 27) アランピース，バーバラピース：話を聞かない男、地図が読めない女 男脳・女脳が「謎」を解く，143-169，主婦の友社，東京，2002.
- 28) 畠山和人：管理者から見た男性看護師の現在とこれから，看護教育，45(11)，1038-1047，2004.
- 29) 北林司：男性看護師が認識する男性であることの特異性--X県におけるインタビュー調査から，看護学雑誌，66(11)，1022-1027，2002.
- 30) 松田安弘：少数者としての職業経験－個性輝く職業活動の展開に向けて－，看護教育学研究，

23(2), 4-5, 2014.

- 31) 矢原隆行：男性ピンクカラーの社会学－ケア労働の男性化の諸相－，社会学評論，58(3)，343－356，2007.
- 32) 前田貴彦，立松生陽，辻本雄大，他：女性患者と女性看護師への関わりに対する男性看護師の実態，三重県立看護大学紀要，18，37-41，2015.
- 33) 辻本雄大，前田貴彦，立松生陽，他：男性看護師のキャリアおよびキャリア志向に関する認識と実際，日本看護学会論文集 看護管理，44，63-66，2014.